

循環型社会のイメージの作成について

1 循環型社会白書に発表した3つのシナリオを参考にしつつ、イメージをまとめる。

【参考：3つのシナリオ】

シナリオA：技術開発推進型シナリオ

極めて高度な工業化社会。廃棄物等は品目別毎に収集され、高度化した静脈物流システムにより集積され、廃棄物発電などのサーマルリサイクルも活発化。

シナリオB：ライフスタイル変革型シナリオ

生活のペースのスローダウン。家の手入れや家庭菜園などの園芸を行ったり、ものを修理しつつ大事に使う生産的消費者への変化。地域活動への参加、地産地消といった小さな経済で充足感を得る社会。

シナリオC：環境産業発展型シナリオ

環境効率性が高く、産業の高次化が進展。環境産業の発展により経済成長もしながら、そのような産業が供給する環境配慮製品やサービスにより暮らしの面でも環境負荷が低減。

2 主にイメージでは、

- 1)生活に関すること（ライフスタイルの変化等）
- 2)企業の活動に関すること（ビジネススタイルの変化、静脈産業の発展等）
- 3)基盤の整備に関すること（情報、科学技術、施設等）

について取り扱う。

3 循環型社会形成推進基本計画に盛り込む数値目標との整合性、イメージの達成に必要な施策水準となっているかについて AIM/Material モデルを用い試算し、イメージ、数値目標、国の取組等の検討のための参考とする。

【参考】

新・生物多様性国家戦略（平成14年3月地球環境保全に関する関係閣僚会議決定）の第2部第2章第2節「国土空間における生物多様性のランドデザイン」では、国土空間における生物多様性の将来像のイメージを（別紙）のように記述している。

第2節 国土空間における生物多様性のランドデザイン

国家戦略における「ランドデザイン」のイメージは、以下のようなものです。

まず国土空間における人間と自然の関係についての基本認識基本方向として次の3つを挙げます。

第一、自然を優先すべき地域として奥山・脊梁山脈地域、人間、人間活動が優先する地域として都市地域があり、その中間に人間と自然の関係を新しい仕組みで調整されるべき領域として広大な里地里山・中間地域が広がっている。これは生物多様性保全のための基本認識であり、また、生物多様性回復のためのポテンシャルの認識でもある。

第二、これまで生物多様性保全への寄与を必ずしも意図していなかった、道路、河川、海岸などの整備を、国土における緑や生物多様性の、縦軸・横軸のしっかりとしたネットワークと位置付け、奥山、里地里山、都市を結ぶ。

第三、住民・市民が、自らの意志と価値観において生物多様性の保全・管理、再生・修復に参加し、生物多様性がもたらす豊かさを享受し、また、そうした行動を通じて新しいライフスタイルを確立する。

こうした基本認識、基本方向を踏まえ、国土空間における生物多様性の将来像のイメージとして次の点を挙げます。

数千、数万キロメートル離れた遠い国から飛んできた鳥たちが、そここの森や干潟で遊び、餌をついばむ。老夫婦がその近くでコーヒーを飲みながらバードウォッチングを楽しんでいる。

千島や赤道近くから流れてきた海流は豊かな生命を育み、大漁をもたらすとともに、子どもたちは潮干狩りや磯遊びに目を輝かせる。北の海ではアザラシが子育てにいそしみ、果てしなく続く砂浜から貝やカニたちの喧騒が聞こえてくる。南の海にはサンゴ礁に様々な彩りの魚が群れ、青々と茂る海草の間をジュゴンの群れが過ぎていく。

奥山のみならず里地里山都市にも巨木が点在し大都市にも大規模な森があり猛禽類が悠々と空を舞っている。

うっそうとした奥山の森をカモシカがゆったりと歩き、植林地では若者たちの努力によって間伐がなされ、豊かな森が維持されている。

国土の中間に帯のようにつながっている田園地帯には、美しい水田が広がり、自然再生事業やNPO活動などによって湿地やため池も復元されている。そこには、かつて絶滅の危機に瀕していたと言われたメダカやタガメが豊かに生息し、子どもたちは魚をとり、トンボを追い、涼風の中を走る。近くの里山に目を転じれば、ノウサギが跳ね、手入れされたコナラ林にギフチョウやカタクリが回復している。

蛇行して流れる川にはサケが遡上し、紅葉する岸辺をかすめてカヌーが静かに下っていく。

ビルのオフィスから外を眺めると、臨海部には明治神宮の森に倣って全国の人々の参加により育てられた森が広がり、その先に再生された砂浜ではウミガメが産卵する。都心側に目を転じるとビルの屋上も豊かに緑化され、大都市とは思えぬほど野鳥のさえずりが聞こえてくる。

地方都市の鎮守の森ではムササビが巣を造り、フクロウが鳴く。皆で作った校庭の池や小さな森で親子が生きものを観察している。

都市、町や村に、生き物たちのにぎわいがあり、人々は彼らとのふれあいを通して生活のにぎわいを感じる。

生物多様性国家戦略における「ランドデザイン」を考えるということは、つまり、単なる土地の広がりだけではなく、地下から空中、地下水、海洋まで、そして土壤微生物から空を飛ぶ鳥までを国土として捉え、生物多様性の観点からの将来像を示すものです。

生物多様性は、極小の遺伝子レベル、数十m²の湿地から大規模な森林、流域レベルまで、重層的な構造となっています。また、わかっているものだけで日本で約9万種の生物種が、何万年を超える時間を経て、複雑かつ有機的に連関して成立しています。

本来、人々は、自然を生産手段として利用してきただけではなく、土地と多様な生物からなる自然を不可分なものとして捉え、風景として眺め、時の移ろいや季節を感じ、日々の暮らしや生業の中で自然の豊かさを享受してきました。私たちの暮らしや習慣、美意識に至るいわゆる文化は、地域に固有の自然の上に初めて成り立っています。むしろ、自然と人間の関係の長い積み重ねによって、地域のアイデンティティを形成し、時には人々の誇りの根源としてきたとさえ言えるでしょう。

明治以来の近代化、とりわけ戦後の歴史が、経済や利便性を向上させたという意味で輝かしい成功であることは明らかです。しかしその反面で、国土の風景を貧弱にし、自然を破壊し、かなりの数の生物種を絶滅ないし極端な減少に追いやって、自然との関係における人々の生活の豊かさを奪ってきたことも否めない事実でしょう。また、大都市住民、とりわけ子どもや弱者が、自然と切り離された人工的環境に住まざるをえないことによって、しばしば精神的安定を失いつつあることは、多くの識者の指摘するところでは、

また、地球環境の危機は、個別地域の環境問題の積み重ねの結果ですから、地域の生物多様性の保全やその中核としての森林の整備、さらに自然の再生・修復に積極的に取り組んでいくことは、地球環境問題を解決していくための大きな柱となるでしょう。

こうしたことを基本認識とした上で、国土空間における生物多様性のランドデザインを考え、百年、二百年がかりで再生していくことが重要です。